

トロールを悪くする)と②和食への回帰(それによる脂肪エネルギー比は 25%以下とし、繊維成分、系不飽和脂肪酸摂取、抗酸化食、抗血栓食)を推奨している。また、③運動療法(適度な有酸素運動(20分)が代謝の改善に連なる)、④必要に応じ薬物療法(重症度、心血管病発生の必要などを勘案して予病治療するが2次予防に天然型VE剤は心脳ともに効果が期待されるとする報告が

多く見られている)、⑤それによるプラークの安定化へのリスク管理が重要と考えている。

今日、食の不安が先述したように80%に達し、又、生鮮食品微量栄養素の欠品が多く知られている。以上のことから、日本伝統食の復興を提唱するものである。

日本文化人類学会北海道地区 2004年度研究懇談会報告

桑山 敬己 (北海道大学、日本文化人類学会理事)

意外と知られてない事実であるが、日本文化人類学会(旧・日本民族学会)は(1)北海道・東北地区、(2)関東地区、(3)中部地区、(4)近畿地区、(5)中国・四国・九州・沖縄地区、の5地区に分かれていて、各地区で年に複数回の研究懇談会が開催されている(詳細は日本文化人類学会のホームページ「各地区研究会・シンポジウム情報」の欄を参照)。我々が属している北海道・東北地区は、さらに北海道と東北の2つの地域に分かれていて、それぞれ独自の研究懇談会を行なっている。日本文化人類学会から下りる助成金は、各地区(地域)の会員数を基に決められており、北海道の場合は年間5万円である。道内の研究活動を活性化するため、なるべく道外から講師を招きたいと思っているが、予算が限られているので年数回の開催が限度である。

そんな状況下で、2004年度は2人の講師を道外からお迎えすることができた。内容は以下に記すが、とても交通費や宿泊費を提供することはできないので、お二人とも他の用事で北海道にいらしたとき、「ついでに」講演していただくことになった。もちろん、事前の打ち合わせが必要だったが、講師として適当な方をご存知の場合は、ぜひ情報の提供をお願いしたい。2004年度より、研究懇談会は北海道民族学会との共催という形をとっている。

第1回研究懇談会(2004年10月31日)

講師：ナンシー・ローゼンバーガー
(米国オレゴン州立大学人類学部教授)
演題：医療人類学とアメリカにおける食の安全性
通訳：保岡 啓子(北海道大学大学院博士課程後期)
場所：北海道大学

ローゼンバーガー女史は日本研究が専門で、編著書に *Japanese Sense of Self* (Cambridge University Press, 1992)、著書に *Gambling with Virtue* (University of Hawaii Press, 2001) などがある。理論的には医療人類学を柱としていて、今回の講演ではアメリカにおける「食の安全性」について話された。ただ、原題は *food insecurity* だったので、焦点は「いかに食料を確保するか」という問題にあった。

豊なはずのアメリカに、なぜ食糧確保の必要があるのだろうか。実は、今日のアメリカでは貧富の差が広がっており、食べ物が十分でない世帯は何と全米で9パーセント、ローゼンバーガー氏が調査したオレゴン州では12パーセントにも上っているのである。同州の経済的下層(下から20パーセント)の年間収入は、1990年から2000年までの期間で約15,000ドル、日本円で200万円を大きく下回っている。

ローゼンバーガー氏は、オレゴン州立大学のあるコーヴァリス (Corvallis) 周辺の3つの町で、貧民層を中心にインタビュー調査を行ない、彼らの食に関する実態を調べた。その結果を、研究懇談会ではスライドを見せながら、食べ物に困っている人々の惨状について語られた。ここでは一人の女性の言葉を紹介しておこう。

「きちんと食べられない人がいるのは、教育がないからじゃないの。体に良くない食べ物しか買えないのよ。インスタント・ラーメンなんか、おなかはいっぱいになるんだけど、質が問題ね。だから体の調子を崩したり、糖尿病になったりする人がいるわ。牛乳や卵は高すぎて、とても手が出ないし。」

ローゼンバーガー氏は、現代アメリカの貧民層にとっての人生、および彼女らにとっての民主主義の意味について批判的に、しかし終始笑顔を絶やさず話された。そして、バランスを欠いた食生活に起因する肥満や糖尿病、栄養失調からくる子供の注意散漫といった現象は、「政治的身体 (political body)」の兆候なのだと結論付けられた。



写真1 ローゼンバーガー氏

第2回研究懇談会 (2005年3月5日)

講師：太田 好信 (九州大学大学院比較社会文化研究科教授)

演題：太田好信・浜本満 (編)『メイキング文化人類学』の舞台裏

場所：北海道大学

今日、日本の文化人類学者でもっとも知的刺激にあふれる発言をし、国内はもとより国際的にも華やかな活躍をされている一人が太田好信氏である。著書に直接触れた人も多いであろうから業績紹介は省略するが、太田氏は何と札幌の出身である。たまに帰省すると聞いていたので、研究懇談会の講師として招きたいと申し出たところ、二つ返事で引き受けてくださった。

今回の研究懇談会で、太田氏は浜本満氏と編集された『メイキング文化人類学』(世界思想社、2005年)について語られた。この本は今年の2月に刊行される予定だったので、懇談会参加予定者には前もって読んでもらい、その上で実際の本作りについて話を伺う予定であった。残念ながら、刊行が1ヶ月ほど遅れてしまい、当初の目論見は外れてしまったが、出版社の厚意により参加者には当日2割引で、それも全国に先駆けて配布することができた。

『メイキング文化人類学』には、人類学史上に偉大な足跡を残した10人の学者についての解説がある。この本の特徴は、その解説が単なる学説史ではなく、実際のフィールドワークから民族誌を書くまでの過程に注目したことにある。当然、10人の中に誰を入れるかが問題になるが、太田氏自身はフランツ・ボアズ (Franz Boas) について書いている。ボアズは「アメリカ人類学の父」と呼ばれているわりには、日本ではあまり知られておらず、彼の著作はいまだに翻訳されてない。しかし、太田氏はボアズを高く評価しており、それは太田氏がアメリカに留学したときの先生の影響であるという。

太田好信という名前には、戦闘的なイメージがつきまとう。それは、太田氏が人類学の政治性について積極的に取り上げ、刺激的な発言を繰り返してきたからだが、彼にしては珍しく完成原稿なしの話を数時間そばで聞いていて、私は一つのことを確信

した。それは彼の人類学、ひいては学問に対する青年のような純粹さと情熱である。そして、彼は何よりも自分自身に対して正直なのである。燃えるような情熱をマグマのごとく噴き出すからこそ、他の研究者と衝突することもあるのだろう。若い人には情熱なぞ当たり前のように思われるだろうが、太田氏と同年代の私には、それがいかに稀有なことかよく分かる。特に、大学という制度の中に身を置くと、本来学問とは無縁なことに手を染めることが多く、「墮落」していることにさえ気付かないで、研究者人生を終えることがあるのだ。

そんな人生とは無縁の太田氏も、多少年をとられたのか、教育者としての側面も見え始めた。研究懇談会に参加した一人の中年男性からは、「私はあなたに教師を感じる」という、恐らく太田氏自身も驚きのコメントがあった。その人は中学校の教師である（懇談会の後に開かれた懇親会の場で、彼は太田氏と同じ中学校の同級生だったことが分かった）。彼のコメントが的を射たものかどうか、疑問に思う人もいるだろうが、『メイキング文化人類学』の序章の結びの言葉をみると、あながち間違いではないように思う。太田氏は次のように書いている。

「七、八〇年代にかけて文化人類学を学

んだわたしたち執筆者が、これからも文化人類学を再生する仕事を続けるためには、それを支持し、そしてその過程に積極的に加わってくれる人たちが必要なのである。そういう人たちがひとりでも増えることを望んでいる。わたしたちは、文化人類学者としてのみなさんを待っています。」

最後に、研究懇談会全体について一言付け加えると、北海道は札幌に一極集中しており、その札幌の中でも場所および設備などの条件的制約から、北海道大学で行なわれることが圧倒的に多い。そして参加者の多くも北海道大学の教員および学生である。私は北海道大学に勤めているので、正直に言ってこれは便利なのだが、文化人類学／民族学の普及・発展という面では問題があるし、他大学および他地域への公平性という面でも、再考の余地があるように思われる。現実には、JR札幌駅から歩いて5分程度の北海道大学にかなう場所はないだろうが、便利さにかまけていると、東京に一極集中を起こしている日本の地方版になってしまう。少なくとも、道内から講師を招くときには、これまでとは違ったやり方があるのではないだろうか。皆さん、お知恵とお力をお貸してください。

訃報

昨年(2004年)、北海道民族学会初代会長 岡田 宏明先生、
同じく第3代会長 和田 完先生が、お亡くなりになりました。
学会へのご尽力に感謝するとともに、
お二人のご冥福を心よりお祈りいたします。